○司会者（瀧川）　　それでは、間もなく開始したいと思います。

最初に、本学の大方学長から御挨拶させていただきます。

○大方学長　　皆様、本当にこの３月のとてもお忙しい、今日、卒園式が重なっているところもたくさんございまして、また、年度末でいろんな人事のことや、新しいクラスの御準備で非常にお忙しい中、たくさんの方に御参集いただきまして、どうもありがとうございます。今日、オンラインで入っていらっしゃる方が100人以上おられまして、東京とか、関東とか、地方の方もzoomで、ぜひ無藤先生のお話をということで、対面でも120人くらいの方が今日お申込みいただいております。ありがとうございます。今日は熊本とか、北九州とか、下関とか、対面ですけれども、遠くからも来ていただいておりまして、本当に心から感謝したいと思います。

無藤先生のことは、皆さん、よくよく御存じだと思いますけれども、最後(配布資料)のところにプロフィールがございます。白梅学園大学名誉教授、一般社団法人保育教諭養成課程研究会、一般社団法人日本幼児教育・保育者養成学会の理事長でもいらっしゃいまして、今、指針・要領の改訂に入っておりますが、もちろん前の改訂からずっと無藤先生が今の保育・幼児教育の基盤をつくってきてくださり、今でこそ、こども園が当たり前の時代になりましたけれども、逆風のさなか、今のこども園の基盤をつくってくださったのも、本当に無藤先生の御尽力が非常に大きゅうございます。今日は特に対話型で、ただ単に講演というのではなくて、事前に皆さんからたくさんの御質問もお寄せいただき、事前にいただいたものは全てすぐに先生が書いてくださっていて、多分、今日、全部回答できないだろうからということで文章化して、今、レジュメでお配りさせていただいています。

今日、当日にもまた質問をぜひ受けたいとも言ってくださっていますので、皆様から、対話型で、交換的？にこの研修ができたらと思っています。ひととき、どうぞよろしくお願いいたします。

すみませんが、今、災害・地震もありますので、通路に荷物を置いている方は、逃げ道の確保で、椅子の下に荷物をお願いしたいと思います。

そうしましたら、無藤先生、来られていますので、拍手でお迎えください。よろしくお願いいたします。

（満場拍手）

○司会者　　今、無藤先生が着席されました。

本日の流れにつきまして、お伝えさせていただこうと思っております。本日はテーマとしまして、無藤先生の著書『「愛と知の循環」としての保育』を巡っての質疑の会ということで銘打ってさせていただきます。

私、総合保育研究所の瀧川と申します。よろしくお願いします。

最初に学長の挨拶がありましたけれども、改めて今回、この企画の趣旨ということで伝えさせていただこうと思います。この本について、いろいろな方々に知ってほしいということがあります。さらには、無藤先生にいろいろ質問してみたいということもありますので、今回こういう企画をさせていただきました。

今から第１部としまして、事前にお寄せいただいた質問と、もう一つは、第１部の後半には、皆さんフロアからの質問をしていただこうと思っております。その際、積極的に挙手いただければと思っております。

本日、こちらのものに関しましてはオンラインで同時配信させていただいております。さらには、それらを後日、本学のホームページからリンクを貼った形で、皆さんに見てもらえるようにと思っております。なので、後ほど質問をいただく際に御協力いただきたいのは、所属とお名前、自分の質問は後ほどカットしてくださいということがないようにお願いしたいと思っております。

それでは、ただいまから第１部を始めさせていただこうと思いますが、おおむね90分ほど時間を使わせていただきまして、その後、休憩を取りたいと思います。その後、第２部に北野先生との対談をしていただこうと思っています。その際にはまたアナウンスをさせていただきます。最終的に４時25分終了予定となっております。

では、今から無藤先生に質問を投げかけさせていただこうと思いますが、お手元に冊子の形でまとめさせていただきました。こちらの質問につきまして、無藤先生に事前にお送りしたところ、手短に回答してくださいました。これを基にしながら、私のほうで幾つか質問を投げかけさせていただこうと思っております。

それでは、ただいまから１つ目の質問を代表して私が上げさせていただこうと思います。実は全部で24個あったんですけれども、全部を御紹介するわけにはいかないなと思いましたので、先ほど、私と無藤先生とで協議いたしまして、私の関心が高いところを中心にということで質問をさせていただこうと思っております。そして、無藤先生に、この質問を投げかけさせていただきますということはお伝えさせていただいています。

では、まず一つ目。そもそも『「愛と知の循環」としての保育』についての理解という

ことで１番目ですけれども、御著書の題名を決めた思い。そして、理由。さらに題名に至るまでの思いや葛藤など御教示いただけますと幸いですというような御質問でした。

では、こちらについて、無藤先生、よろしくお願いいたします。

○無藤氏　　「愛と知の循環」というのが本のタイトルというだけじゃなくて、出している捉え方の一番中心となるところなんですけれど、この本をお読みいただくと分かりますけど、「愛と知の循環」の解説の部分はもちろんあるんですが、それ以外にいろんな話題が入っておりますが、それらが全部つながり合っているというところが肝心なんです。それについては今日どこまで話せるか分からないけれども、おいおいですが、そういう中で、特に愛という言葉を使ったということが多少の思い切りが必要であるわけです。

子どもが周りの世界を愛するよねという言い方は、私はしょっちゅう自分の考えをメモしているので、遡ってみたら2013年くらいから考えていたらしいんですけど、つまり2010年前後から考え始めていたと思うんです。

それがちょうど、要領・指針の改訂が2017年なので、あれの準備が2015年くらい、２年くらい前から始まっていますね。私はその委員というか、座長みたいなものをやっていたので、毎月会議をやっているんですけど、そういうところで、こういうまだ生煮えのことを出すわけにもいかないので、多少つながり合ってくるのは資質・能力と考えました。それが知識・技能と、思考力と、学びに向かう力、組み合わせ。それはいろんな解釈ができますけれども、学びに向かう力というのが、心情、意欲、態度となって、余り説明がないんですが、その心情というのが、子どもが周りのものに出会って、面白く感じたり、好きになったりみたいなプロセスとして捉えているんですが、そこまで要領の解釈にして妥当だと思うんです。それをもう少し踏み込んで考えられないかなと思っていたんです。

そういう、ある意味で情緒的な関わり。同時に、愛と言いたいのは周りのものを肯定することとして言っているんですけど、そういう捉え方が幼児期に――私が幼児期と言っているのは、乳児を含めてですから。乳幼児、長いから幼児と言いますけど、そういうことを中心にしたいなと考えました。

だけど、それと、資質・能力でいえば、知識とか思考はつながり合っているわけで、それは関連し合っていくようになる。その辺りをどういうふうに一気に言えばいいかなと思って、どこかで「愛と知の循環」というものを思いつきました。

それは、すごく具体的には2021年に――コロナが2020年でしたけれども、その後１年以上、１年半くらいは余り現場に行けなくなったんですよね、皆さん方。私は幾つかの園

に割と定期的に行くようなところがありますが、その一つで福井大学の附属幼稚園に十数年、正確に覚えていませんけれども、年に３回くらい行っていたんです。その際、一緒に保育を見たり、考えたりしていますけど、その辺で、コロナ前から、コロナのときはリモートだったんだけど、リモートは保育をちゃんと見られないから余りうまくいかないんですが、2021年になってから顔合わせでというか、私が園に訪問して話す中で、子どもたちがいろんなものを好きになるということをしっかり押さえていこうと。これは向こうの附属幼稚園の先生たちの方針というか、研究テーマなんですけど、それはもう少し前からやっていたのを本格的にやるときに、私は、もうそれは愛するというので、その好きになることが後々周りのドングリや虫が好きという話よりもっと大きな、周りに、外に、これから子どもが出会うもろもろのことを好きになることに広がるんであって、それを世界への愛と呼ぶかどうかであってという話をしたんです。

そうしたら、『「愛と知の循環」としての保育実践』という、去年の３月かな、出しまして、そこに福井大学の岸野さんという教授が後書きを書いてくれた。一緒の編纂です。そのときのことを書いていまして、無藤先生が急に変なことを言い出して、みんなが不安になった。ついにもうろくしたかみたいな――それは書いていないですけど（笑声）、何となく説得力があるように感じたんですが、本当にそういうふうに言ったときに全員の頭にクエスチョンマークがだだだっと見える。20、30人なんですけど、それはそうだよなと思いますが、あえて使ってくれたんですね。

理論的な根拠はあったんです。ここではハンナ・アーレントという哲学者ですけれども、挙げておきましたが、アーレントの著作の幾つかに「世界への愛」というものが出てきますが、アーレントだけではなくて、そういうことを言っている人たちが当然ながらいるわけなんです。ですから、私が思いついたときに、アーレントは知っていましたけど、それ以外にどこで言っているとか、そんなにちゃんと考えていなかったが、やはり一度気づくというか、あちこちにあると思うので、そんなに変でもないなという感じはして、それを循環と言ったのは、一回きりの話じゃなくて、つながり合いながら、らせん的に拡大していくことを出すために、らせんでもいいんだけど、循環として、比較的に、それほど難しい感じがしないでしょう。

それから、私は、基本的に鍵となる言葉は、片仮名用語はなるべく使わないようにする方針なので、基に英語があるにしても余り繰り返しは使わないようにしようと思ったというのもあるので日本語で。それで、いろいろ考えたら、結構いろんなことがそこに落と

し込めるんじゃないかなと思うようになりました。

そして、この本も、副題が「世界を愛することを学ぶ」となりましたけれど、世界に広がるのでという話ですが、それはどういうことかというと、いろんなものを好きになっていくわけだけど、園で虫を捕まえて虫が死んだり、そういう福井の幼稚園の実践なんて、そんな言わなくても皆さん方の園にだって起こる普通のことですけど、例えば、園庭があって、いろんな虫を集めると。集めたら図鑑で調べたりするじゃないですか。アブラゼミの何たらとか、どんな虫を飼うとか、調べますよね。調べるというか……。その辺で、特に４、５歳になると命名することが意味を持つことなんですけど、命名することによって今度は逆に、そのものを詳しく、名前が違う以上違うものである。違う特徴を持つんだったらどこだろう。それを今度は描き写す。そういうことが展開していくから、好きになることと、知るというか、分かることが相まって、どんどん広がっていくよね。

広がっていくだけじゃなくて、それは園の中の話なんですけれど、それが今度は園を越えて世の中においてとか、小学校以降、大人になる途中、経過において、またそういうものに出会うよね。そのときに、どういうものに展開するかというのはまた別な検討が要るので、虫を集めた話が虫博士になるということなのか、生き物ということなのかは、もっと小学校以降に検討が必要ですけれども、そういうふうに、そういうものがあるんだよねとなっていけば、世界は全部含んでいますが、その中の生き物の世界、動物の世界、虫の世界、そういうものが好きになっていくという方向に肯定するというか、なっていくんじゃないかなと思っています。

そういうことを受けて、今、福井大の附属幼稚園が何年か、好きになること。さらに、それが世界に開かれること。その後にどう展開していくかみたいなテーマでいろいろ考えてやっていますけれども、というようなことがあって、こういう表題を決めたというのが一番基本的な理由です。

もう一つは、結構格好いいと思わない？（笑声）。やっぱり受けないとねと思う。質の高い保育を目指すという、そんな本は幾らでもあるじゃない。それだと埋もれちゃいますから、私が売りたいというよりは、出す以上は出版社として売れないと申し訳ないので、今、出版業界は不況というのか、大変らしいんです。紙やら何やら全部値上げして、それで、これは400ページほどあって本体3,000円くらいでしょう。ここに今、北大路の人はいないんですけど、3,000円、現場の人は高いと思うでしょうけど、ぎりぎりなんです。売り切っても、私はほとんど、無藤個人では利益がない状況。再販してくれれば別ですけど

ね。だから、相当大変で、3,000円程度に抑えるために、売れそうな部数より余分に出していると言っていましたけどね、ちょっと増やすと。

ということもあるんですが、やっぱり私としては、現場の人が知っているようなお話だとは思うんだけど、それを明確に言葉にするということで、新しい見方というか、それは新しい命名の下で見えるほうがいいかなということが書いてあるんですね。

○司会者　　ありがとうございました。

今、「愛と知の循環」という書名に込めた思いというようなことから話を共有していただきました。ちなみに、先ほどの福井大学附属幼稚園さんの研究テーマが「出会い、気付き、好きになる」でございました。なので、それをきっかけに考えをだんだんと整理してこられたというふうなことが、この書名のところに急激に至っていったことがあったんじゃないかというふうなことであります。

では、続きまして２つ目の質問に行かせていただこうと思います。

次は４番目、専門性というところに関わることなんですけれども、「愛と知の循環」という概念は、保育の専門性を関係的に捉える重要な視点だと感じております。そこでお伺いしたいのですが、保育者養成の中で、この「愛と知の循環」を育てていくためには、どのような学びや経験が重要になるとお考えでしょうか。先生のお考えを聞かせていただけますと幸いですということです。私ども保育者養成校でございますので、学生たちにふだん、保育のこととか学ぶようなことを、いろいろきっかけづくりをしていくわけなんですけれども、改めて養成していく段階でというところで、このような「愛と知の循環」ということをどのように取り入れていくのかということで無藤先生のお考えを聞かせていただきたいと思います。

○無藤氏　　これも満遍なく答えれば、ちゃんと勉強してねとか、ちゃんと教科書を読んでねとか、現場でちゃんと履修してねとか、それはそうだけどね。だから、そういうことは当然養成校としてするんだから、それは前提の上でもう一つ加えているだけなんですけど、ここに書いたように、いろんなことのちょっとした面白さを見つけるというある種の感性というんですか、そういうものを養うというのは必要だよなと思っていて、それはなぜ大事かというと、「愛と知の循環」というときの子どもが環境に出会う最初の部分で、子どもがいろんなことの面白さを見つけるとか、不思議さに気づくとか、そういう出会いのところでのその子の心情というのか、それが大事なのでと思うので、そういう出会いが豊富に、いろんな出会いがあるようにしたいよね。

同時に、いろいろな出会いがあっても、先生が気づかないと見過ごしていくわけで、場合によっては、ちゃんと並びなさいとか言って、別に並ぶのがいけないと言っているんじゃなくて、面白いことをちょっとやっているときに、それを先生が聞き取って、並んで、後で、「じゃ……」、ちょっと入れれば残るわけです。そういうちょっとした面白さが過ぎ去っても、つまり、周りの世界への好奇心の発揮だと思うんです。だから、「愛と知の循環」という話は、ある意味で好奇心から育てるといってもいいわけです。いいんですけどね、「好奇心から育てる保育」だと売れないなというのが、私のキャッチコピー的勘です（笑声）。どうしてかというと、昔そういう本を書いて売れなかったです（笑声）。

そうすると、そういうことを練習するといいよねというか、自分でもできるし、授業でももちろん、100人授業でできるか知らないですけど、できると思うのです。今、紙コップを持ってきました。さきほどもらったものなんですけど、例えば、こういう紙コップがあるときに、この紙コップで面白いことを見つける。いや、紙コップは水を飲むためにあります。入れていただいたお水が入っておりますから、こうやって、これは本来の使い方ですよね。だけど、空っぽの場合。この空っぽの紙コップを幾つも買い込んで、これで遊ぶという実践はあります。たまに見ます。

ごく最近見たのは小学校の生活科でやっていましたが、小グループで、正確に言うと幼稚園の子と小学校の子が一緒になって紙コップ遊びをやっているけれども、幼稚園、保育園でやっている場合もあるし、非常によくあるのが何かを入れて楽器をつくるとか、マラカスみたいなね、横に色をつけて何かするとか、こうやって上に重ねて止めて転がすとか、いろんなことができますよね。

そういうことは保育技術の教科書みたいな雑誌みたいなものにも結構出ていると思いますけども、別にそれでいいんですが、例えば、紙コップを、今、音がするでしょう。これを聞いてほしいんですけど、いろんな音がしますね。

音がするのは当たり前と言えば、もちろん当たり前です。当たり前なんだけど、意識して聞くんですよ。今、口の開いている大き目のほうに、こうなりますね。こっち、底のほうですね。――音が違うでしょう。これは、いずれ小学校の理科でやるようなことなんだけど、幼児レベルでいうと、これ、楽器づくりのゲームと同じですが、音の高さが違う。今、音の高さと響きが違いましたよね。――ね。こっちだともう少し低目の音で、かつ、きつい音ですが、倍音がちょっと違うんですけど、こっちがもうちょっと軽やかで、高い音なんです。混じりますね。

それは、音の強さも違うんだけど、すごく簡単に言えば、共鳴するところが底のほうは浅いわけだけど、こっちは深いので、そうすると、こういうふうにしたときに、置いた瞬間に縁と周りが振動するわけです。底も振動するんだけど、その違いです。

今、たまたまくるっと回ったから――難しいな。――違うでしょう。回転して、くるっとというときは縁の振動を使っているから、ちょっと軽い感じになって、ぽんと置くと重い感じになるでしょう。

皆さん方、大人だから、知っているよね。言われてびっくりする発見をしているわけではないから、それはそうだよね。でも、言われてみれば面白いなと、両方あるじゃないですか。紙コップでお茶を飲んだり、コーラを飲んだり、無数にしているけど、改めて本当の響き聞かないよな。

今のようなことは、幼児でやると結構面白がるんです。もちろん幼児だってコップは知っているから、普通にあるコップの飲むまねくらいしている。でも、ちょっとこうやってやると、「ああ、そうか」となるよね。やり方を知るみたいにね。

もう一つ、この間、割と最近なんですけど、生活科の授業を見たら、子どもたちが、こういうのを、ちょっと重みをつけて並べて、こっちでこれを転がしてボーリングといっているんですね。そうすると、子どもたちはボールを転がすつもりでいるからボーリングになるんだけど、始めるとうまくいかないんですよね。それは、すぐ分かる人は分かる。なぜかというと、回転するんだよね。当たり前ですけどね。

これはもちろん上底と下底、円の直径が違うから、一周する間の動きが違う回転が起こるわけですね。だから、ボーリングは駄目ですよ。あーうまくいかないな。何度やってもうまくいかないな。見ていたら、なかなか最初は気づかない。当たり前だろうと思うんだけど、気づかなくて、一生懸命がっとやりゃいいんだ。それはそうではあるんですけど、でも、そのうち、「あっ、回る」。そうすると、こうやって、「ああ、駄目」とか、「ああ、駄目」とか、もうちょっとやる。こういうふうに回して遊ぶというところにいくんです。45分授業の最後辺りでね。これ、結構いけるじゃないですか。いけるというと変だけど。

この中にちょっとしたものを詰めて重さを変えるとか、もう少し複雑なんですけど、つまり、皆さん方を呼んで紙コップ遊びをしなさいと私は言っているわけじゃなくて、多分どんなものでも、何か不思議なことや面白いことが本当は隠れているのに見逃しているんです。あるいは、子どもは気づいているんだけど、例えば、気づく例だと思うんだけど、子どもの前に紙コップを置いて、おやつか何かで、ジュース、麦茶、待っていてねみたい

なときに、子どもがこんなことをやって遊んでいる。そうやって遊んでいちゃ駄目よと。こうやっていろんな音というか響きを面白がっている子たちがいるんだけど、こうやっていくうちに調子に乗る子がいて、授業、うるさいですけどね（笑声）。でも、面白い音です。だから、おやつの時間に最初からやろうなんてことじゃないけど、「あっ、面白いんだ」。

今、私はわざとこうやっていますが、だんだんリズム遊びになりますね。そうすると、ドラムをたたく、打楽器になってきますね。そうだとすれば、マラカス遊びってよくやるけど、あんな面倒くさいことをしなくたって、これで既に結構いいですよね。それで、いろんなやり方で音が変わっていきます。やっぱり日本の紙コップ、出来がいいんです。このボール紙の質がいい。最近、紙コップを見たら試していますけど、すごく響くやつと、プラスチックのやわらかいのだと余りうまくいかないんですが、それはどうでもいいんですが。

要するに、何であっても、本当はそこに面白さが隠れています。そうしたら、そういうものはいろんなところに見つけられるよね。これを学生相手に、したことはないんですけど、もしやるとしたら、これを使って子どもと一緒に遊べる遊びを、今から15分あげるから10個考えて、見つけてごらんみたいなことです。

それがうまくいくとか、いかないんじゃなくて、むしろいろいろなものを見つける発想の軟らかさです。それは理屈、紙コップについて考えたことがある人は多分いないでしょうから、つくっているときはとりあえず動かして、中は手で？考える。こうやったら違う音が、いいんじゃない？　あっ、馬がぱかぱかするやつだ。いろいろ思うんですよ。これを２人で交互にやったら、いいよねとか。そういう練習をいろいろするというのは割と面白くて、私は学部生相手の授業も久しくやっていない。そういうのもやったことはないですけど、例えば、院生相手に話すときに、そんな訓練というほどちゃんとしたことじゃないんだけど、こういうものについて、子どもたちにとって面白くなることを10個見つけようみたいなことです。面白いとか、不思議とか、謎とか、美しいとか、格好いいとか、全部見てみる。結構いろいろあります。音が出るとか、照明を当てると分かるけど、輝いて、透明だから当然向こうが見えますのでとか、いろんなことが出てきますよね。

なので、御質問でありますが、そういうものを保育の専門性というかどうかよく分かりませんけれども、通常、養成校として教えるべきことはたくさんあるので、それはもちろん知識として身につけてほしいわけだけど、それとともにある種の感受性。それは、子

どものすることへのそれぞれの人の開かれた感覚みたいなことで、そういうものは、ある人はあるし、ない人はないという感じがあるんだけど、ない人は、そもそもないというよりは、そういうことを出す習慣がないというか、生真面目に生きている、実用的に生きている。これは当然飲むものと思うけど、それ以外のことをしないみたいなことです。

脱線して終わんない（笑声）。数日前、夕方、東京の道を歩いて、保育園帰りだと思うんですけど、お母さんと５歳くらいのお子さんが歩いていて、お母さんが先に行っていて、見ながら、ぱぱぱっとやって、要するに鬼ごっこというか、追いかけっこというか、後ろの子も全力で追いかけるわけじゃないんだけど、走るまねというか、ちょっと走って、追いつきそうになると、お母さんがまたちょっと逃げてとやっていたんです。私は反対側から歩いて、面白いことをやっているなと思いながら、じろじろは見ないですよ（笑声）。本当に私のようなおじさん、おじいさんですけど、じろじろ見ると通報されるんで、これはまじに通報されるから危ないんですよ。公園で幼児が遊んでいる。ベンチに座ってずっと見ていると本当に不審者なんで、何もしていなくてもということがあるから、そうじろじろ見ないですけど、子どもと車道の境目に、ガードレール的な意味だと思うんですけど、１メートルくらいの棒が10本くらい立っていたんですが、そうしたら、お母さんがそれを見て、こうやって立っているところをカーブして、こうやって、こうやってという感じで動いている。そうしたら、子どもは喜んで、同じようにこうやって追いかけるんです。うまいなと思って、即興で遊びを見つける面白さというか。

でも、考えたら子どもって、ちゃんと歩きなさいと言えばちゃんと歩くんでしょうけど、ちょっとした段差も一々乗っかったり、狭いところをわざわざこう入ってやっていたりするもんじゃないですか。だから、そういう子どもの面白さを見つけるセンスのある人があるんですよね。余裕というふうに見れば。でも、ある程度練習すると、できるようになることが結構あるみたいなことです。

○司会者　　ありがとうございました。

今、養成校の学生にということでのお話でしたけれども、今のような話を、私もそうですが、養成校で勤めている先生方は、ちょっと取り入れてみたいなというのがあったかと思います。

そして、まだ若手の先生方も多分そういうところ、通用するところがあるんじゃないかと思いますので、先生が遊び心というんでしょうか、そういうところをくすぐるような研修も必要なのかと思いました。

今の紙コップというふうな素材から考えたとき、探究ということにもつながる要素もあるのかなと思いますので、次の２―１のところについての質問を投げかけさせていただこうかと思います。探究的な学びに関わって、幼児が言葉、特に「もの」とセットの言葉が幼児期から小学校へと切れ目なく学びがつながっていく鍵となるということにつきまして、幼児の言語化と保育者の言語化というところについてお聞きできるとうれしいですというような質問がありました。その辺り、いかがでしょうか。

○無藤氏　　子どもが言葉を使う。もちろんいろんな機能を持っていますけれども、それに対して保育者が言葉を使って子どもに呼びかけたり、話をしたり、当然重要であるわけですよね。その辺りの議論は、私のこの本の中では割と手薄だと思うんです。最初にお話ししたように、全部は書き入れていないので、この辺は本当はもっといろんな議論をしなきゃいけないんですが、特に終わりのほうになると、自分で思うんだけど、何か書けなくなってきていた。これ以上、編集上、マークされては困るから、いろんなことを割愛するだけじゃなくて、簡単に言うという方向でまとめたから分かりにくいところはあると思います。

ここでの話は、私が思っている具体例は、サークルタイムとか、福井の附属幼稚園はみんなの時間といいますけれども、それぞれが一通り遊んだ後に、福井の附属だと９時までには登園しているんです。割とすぐに園庭、保育室。基本的には自分のクラスがあるんですけど、それを拠点にしながら、ほかにも行っていい。で、遊んでおりますが、幼稚園なので年齢で少し違いますけど、11時少し前くらいに集まるか、年長だと11時過ぎたりしますけど、クラスに集まって話合い時間というものがあるんです。

そこではいろんなことをやっているんですけど、そのメインが、子どもたちがつくったものや見つけたものなどを持ってきて紹介するというのがあって、「じゃ、何かみんなに言いたい人、見せたい人いない？」。そうすると子どもが出てきて、「今日はここのところに穴を開けて見えるようにしたんですよ。その後、もう一つ持ってきてつなごうと思うんだけど」みたいなことを言うんです。ほかの子は「おおっ」となったり、「えっ、見せて」となったり、去年見たのは、こういうものを上につなぐという話。「なかなか倒れちゃうんだよね」と。そうしたら、ほかの子が来て、ここをテープで止める。でも、「倒れるね」と言って、２つつないでここを安定させたらどうかとか、いろんなアイデアを出しながら意見交換をやっているんです。

そこで私が関わってきたわけですけれども、一つは、幼児の言葉は基本的に物とセット

で語ろうよ、語らせるようにしましょうよということなので、物をつくった場合に、今日はここが穴。例えば、おうちだとして、窓にしてから開けるんだけど、本当は窓がこうなっている。観音開き、こう開けたいんだよ。２つやればこうなる。うまくできなくてみたいな。で、はさみで。でも、余り切れないしとか、例えば、そんなことをやっているわけです。そういう子どもたちの、こういうことを工夫したよねという言葉が、物がないと伝わらなくて、物がなく何年か前はやっていたんですけど、聞いている子が何だかぽかんとしているわけです。言っている意味が分からない。それは分からないわけですけどということで始めたので、幼児の言葉というのが、言葉が自立するよりは、活動の中で行われているというか、物と一緒に行われているというか、だよねということですけど、同時にそれが、言葉を交換することによって、言葉のやり取りとしては成立していくわけで、そこに、例えば、補助として先生が写真を撮って見せるとか、子どもが描いたものを持っていくともっとよく分かるんです。

実際、物をつくって運べるやつはいいんだけど、例えば、砂場で工夫したというのは見せられないじゃないですか。なかなかうまくいかなくて、今、お花とか、キノコとか、その場にあるものは写真で示す。子どもに持たせて、あるいは先生が図に描いて説明して、それはある程度できる。時々は、「じゃ、見に行こう」と言って20人くらいが見て「こうなのか」をするときもある。それから、ダンスをやっている子たちが、今日はこういう工夫をしたんだみたいなものは、「じゃ、みんなの前でやってもらおう」「ああ、そうか、そうか」みたいになって、「でも、そこのこういうところはもっとこうしたらいいんじゃないの」とかします。

砂場のものはなかなか難しいんです。運べないし、見に行こうといっても、もう片づけられているのでなかなか難しくて、何度かいろんな工夫をして、iPadで動画を撮っておいて見せるというのもやっています。いま一つな感はありますね。あのリアリティーはなかなかないなというのはあるんですけど、まあいろんな工夫で、一律ではないけど。というふうに、幼児の言葉の発生というのが、そういう活動の中のものとしてまず広がっていくのかなと。その活動の子どもたちの発見などを言葉にすることで、その言葉が今度は自立して、次に展開していくということも出てくるようになります。

そうすると、次第にそれが、ここに「遊びの工夫や発見が園の文化の中に組み入れられ」と書いてあるのは、そういうふうにやるんだ。それをみんなの前で提示し、言葉化していくと、みんなの記憶に定着していくわけですよね。

一度入ると、大体その次の年度に下の子たちに継承されるので、何年かやってみて、だんだん園の活動のレパートリーが広がっていくというところがあります。そういう意味では、それはそのものの環境におけるものと、子どもたちがそれを工夫して遊ぶことと、それをみんなの前で提示する。それを先生が写真に撮って明示していくんで、その場にいた子以外にも伝わっていくという辺りが面白いなと思います。

○司会者　　ありがとうございます。

今のことはサークルタイムの在り方を考えるきっかけにもなるのかと思います。今の実物というふうな辺りです。いろいろ工夫ができそうなことだと思います。ありがとうございます。

では、同じく実践的な視点、もう一つです。２番目に行きたいと思います。現代は幼少期からデジタルデバイスに触れる機会が増えていますが、画面越しの体験は、先生の提唱される「身体を伴う愛と知の循環」にどのような影響を与えるとお考えでしょうか。これからの時代、私たちが特に意識して守るべき「知の在り方」があれば教えてくださいということでございます。いかがでしょうか。

○無藤氏　　これはまさに現在進行形の話で、幼児がＡＩを使うというのは余りないことなので、とりあえずＩＣＴの様々な機器を利用するということは広がってきていると思うんです。もちろん、うちの園はそれをしないで、別に、後に重大な問題が出ることはないわけです。

園でそういうふうに用いることと、家庭でYouTubeや、その他のＳＮＳをたくさん見ることは区別しないといけなくて、こういう問題については研究がたくさん出ておりますが、家庭でそういうＳＮＳでずっとということの最大の問題は時間が長くなる。時間が長くなるということは他の活動を奪う、時間を奪うわけで、例えば、運動が足りなくなるとか、本や絵本に親しまなくなるとか、親子のやり取りが減るということとセットになっているわけで、これは乳幼児に限らず、今、小中学生にとっても本当に深刻な問題になってきています。

オーストラリアが16歳未満だったかな、ＳＮＳ利用を禁ずると。あれは家庭でのそういう利用を禁ずる。別に学校でやめたわけじゃないですよ。学習利用は別にいいと思いますけど、それに続く国も出てきていると思いますが、深刻なわけです。その問題を日本でどうするかは、これからの２、３年で割とはっきり乳幼児について出す必要があると思いますけれど、その問題と、園で使うというのは全然違う話で、園で無制限に使うというの

はないと思いますけどね。使っているところも増えてきたんですが、では、どういう場合に使うかというと、一つは図鑑代わりということです。最近、大人向けの図鑑や百科事典は完全にＳＮＳ、ネット図鑑に移っているわけで、紙の辞典とか図鑑は消えつつあるわけです。百科事典はとっくにそうなっています。

検索に便利だと言っていることと、なるほど便利だなと思ったのは、虫の鳴き声とか、鳥の鳴き声とか、小鳥が飛んでいるものを動画で撮って検索をかけるんです。そうすると、出てくるんです。これは超便利で、紙の図鑑では無理じゃないですか。

皆さん方も、例えば、多少緑のあるところを散歩して、鳥の声が聞こえたときに録画しておくと検索できます。あるいは、専用のすごい親切なホームページみたいなものを探してもいいんですけど、この辺を知りませんが、東京だと緑のあるところ、公園、たくさんあるので、結構いろんなところで飛んでくるんですよ。スズメとか、メジロとか、モズとかあるんだけど、小鳥の形で見分けるプロフェッショナルレベルの人には分からないですけど、簡単に言うと、そういうよさはありますよね。一番簡単にはセミの鳴き声ですけど、あれはすぐ。と同時に飼い方です。虫を大抵飼いたくなるんですが、そのときに、図鑑にも飼い方は出ているんだけど、ＳＮＳで調べると親切なんですよ。細かい情報が出ていたり、質問できたりすることがあって、調べる活動がある。

それから、最近だんだん増えてきたのは、タブレットに顕微鏡をくっつけて、100倍、あれがやたら細かく見えるんですけど、ああいうもので虫の細かいところとか、砂とか見て、それから、花の小っちゃいやつがあるんですけど、もう３月だから、ﾔﾂｳのような、そこら辺に小さな花が咲く。そういう肉眼だと見えにくいものを拡大するんですけど、いろんな意味で面白いです。

それから、どこでもやるという話でもないけど、遠くの人とのやり取りで、それはそうだなと思ったのは、沖縄の人が北海道、交換して、それは実際に多分交換で行っているんだけど、それ以外、「今どうしてる？」みたいな。沖縄は冬って２月、十何度くらい、北海道は雪みたいな、ニュースや写真で知っていますけど、生々しいやり取りは実感が全然変わるらしくて、そういういろいろなものと実際の活動の入り交じり方が面白いなと思うんです。

去年、そうかと思った一つは、やっぱり福井の附属ですけど、ほかでも見ましたけど、宇宙遊びというのがあるときはやり出しまして、図鑑が好きだとか宇宙の図鑑、そういう知識、単純な紙の知識ですが、やりますよね。幼稚園や保育園だと夜までの観察は難しい

ですけど、そういうものを勝手にどんどんやるうちがあって、そうすると、この間、金星が夕方、西に、三日月みたいに見えるんです。実際に目で見えるんですけど、そういうものが普通の望遠鏡で見えますけど、やるとか、この数か月、御存じかどうか知らないが、スーパームーンが割と頻繁に動くわけです。そうすると、冬は空気が澄んでいるせいもあるんですけど、月の影というのか、クレーターが割と見えて、なるほど、ウサギが何とかと昔の人は言うけど、まあ見えなくもないよなみたいな感じです。そういうことがあって、小学生なんかだと、夜まで家庭に頼んでやって、今日現在知らないけど、この間までは結構木星が見えたんです。それから、土星が見えるときもあって、土星も肉眼じゃ無理ですけど、双眼鏡程度でも、土星は環があるでしょう。あれが輪として見えるというのとちょっと違う。出っ張って見えるときがあります。要するに、惑星は地球に割と相対的に近い距離に来ているという話です。

そういう宇宙遊びとかなんとか出てきて――思い出した。科学博物館みたいなものに、月の石があるとき来たんです。ＮＡＳＡの展示会みたいなね。そういう意味で盛り上がりがいろいろあったんですけど、そういう中でロケットをつくろうみたいになって、こういうロケットをつくって、それで飛ばしたわけです。なかなか飛ばせないから、これは先生がかなり考えて、大きなゴムを持ってきてつないでみたいなことをやっていたんですけど、そういう一連の流れのときに、ロケットって、今どきの子どもなら全部人工衛星を打ち上げられるんだよと知っているわけですけど、じゃ、見てみようよとなって、種子島で日本のロケットを打ち上げるでしょう。あれは中継されるんですよね。

ちょうどこっちが見る時間にぴったり中継されるとは限らない。天候による。天候ですぐ動くから。多分あれは録画したものだと思いますけど、それで、こういうモニターをみんなで見るんだけど、ニュースだと、あんなもの幾らでもやっているんだけど、リアルタイムに、時間としてね。ドッドッドッドッドッドッと。パンッではないんだよね。ドッドッドッドッドッだけど、まあ割と早めに打ち上げていますけど、結構クラスの子たちが盛り上がって、それで宇宙船号とか、スペースシャトル号とか、いろんなものね。

同じようなことは小学校でもやっていて、小学校だと、本当に夜、宇宙船といいますか、人工衛星とか、あれは全部情報として出るんですけど、人工衛星の中の大き目のものは割と目で見えるんですが、東京は分からないな。大阪は田舎に行くと割と見えるんですが、ちゃんと予報というんですか、何時何分にここを通るというのがあって、ちゃんと動いているんだけど、飛行機とは違う速度で、高さでスピードが出ていますけど、「おおっ」

という感じね。そういうものが、なるほどなと。テレビというか、インターネットですけど、触れる情報じゃないんだけど、うまい提示の仕方の中で、子どもたちの心に食い込んでいく部分がある。

そういうことを考えてきたときに、我々は今後、デジタルデバイスを使うしかないわけだから、そういう中で、子どもたちの体験する部分と、そういうデジタルな情報というものの組み合わせがどんどん進んでいくと思うんですね。

そのときに、ちょっと面白いなと思ったのは、さっきのロケットづくりが出てくるというか、段ボールみたいなやつをつくっていくので、そこを将来、三次元プリンターにしたらどうかね、面白いよねみたいな感じで、微妙な気がしますよね。あっという間に出てきて、その瞬間は喜ぶかもしれませんけど、何日も苦労してつくって、うまく飛ばないんだけどということね。

そもそも５歳くらいの子は、自動車とか、電車とか、このくらいのものをつくるじゃないですか。どう考えても動かないよね。本物じゃない。それで、そっくりじゃないよね。子どもの、新幹線だとかいろいろつくるけど、まあまああるにしても。だから、僕はずっとそういうものを、皆さんもいろいろ見るでしょうけど、そこに彼らのすごい情熱があるんだよね。すごい手間をかけるんですよね。２週間くらい付きっきりででっかいものをつくる。

この間、動画で見たが、消防自動車をつくる。大きなやつです。消防署へ見学に行ったりもして盛り上がるんです。大人も、プラモデルとか、模型づくりとか、熱中する人もいるから、本能的といって片づけては不都合ではあるんだけど、僕は、そういうプラモデルとか面倒くさいなと思う人で、子どもたちの熱中ぶりがいま一つぴんとこないんですが、にしても一生懸命やるじゃないですか。そこに、子どもたちの心に食い込む何か重大なことがあるには違いないよね。

そうすると、単に本物があればそれでいいということじゃなくて、一度自分の体を通して再現しなきゃいけなくて、ここに椅子があって、消防自動車って、２、３歳ならそれで何とか済むんだけど、５歳くらいになるとそれじゃ、赤くないとだめとか。消防自動車と、はしご車だから、ここははしごを入れておく。リアルさを追求しながら、でも、リアルだったってうそじゃない。というところに出てくる幼児たちのパッションと、そこでつくられる知的な把握というのか、僕の言い方で言えば、「愛と知の循環」の濃厚さみたいなことをつくづく感じているということであります。

○司会者　　ありがとうございます。

今、事例で出された消防車の話、荒尾第一幼稚園さんの話ということですね。

○無藤氏　　そうです。

○司会者　　YouTubeで荒尾第一幼稚園と調べられると、今の消防車の実践のことが少し出てくるかと思います。

デジタルの活用とリアルなものをというところでの融合、入り交じりというようなところが今の時代というようなことでのお話であったかと思います。

あともう一つだけ、こちらの質問を投げかけさせていただいた後、フロアからの質問と思っております。今ずっと実践的な視点がありました。次、ちょっと哲学的なところに奥深く、一個、考えていただきたいと思っているところが６番です。教科の見方、考え方という辺りとデューイの話ということで、ここ、すみません、文字化けしておりまして、（日）、（月）となっているところは１番、２番の文字化けでございます。皆さん、見つかりましたでしょうか。

先生は、「教科の見方、考え方を教科の捉え方をどういう現実世界の問題解決へと適応するかという視点であり、知識群を問題解決の道具として捉えること」がデューイ的とFacebookに記されておりました。それは戦後からデューイの教育思想は、現代に至るまで小学校や幼児教育に引き継がれていることでしょうか。

もう一つ、日本の幼児教育へのデューイ思想の受容について、倉橋が語られますが、デューイの教育思想と中教審の審議とのつながりなど、無藤先生のお考えを教えていただけませんでしょうかということでございます。この辺り、お願いします。

○無藤氏　　ちょっと学問的な話になっていますけれども、ここに書いてあるように、デューイに代表されるプラグマティズムの思想だと思います。日本だと、ジョン・デューイが圧倒的に表に出てきますが、ジョン・デューイという人はすごく長生きした人で、90歳くらいだったかな、割と最後まで元気に活動しているから膨大な著作量があるんです。だから、もちろん影響力も強いですが、プラグマティズムの思想そのものは1880年代くらいから現代まで、アメリカを中心に、ほかの国にもプラグマティストはいますけれども、展開してきたわけです。

その特徴というのはいろんな形で整理できますし、いろんな学者がプラグマティズムの流れをくんでいるから、学者によって力点が違いますが、一つは、基本的なところは、人々の普通の実践と、科学のような営みは共通に社会的な実践として連続的に捉えられたと

いうことです。これを非常にデューイは強調しています。したがって、普通の実践にも科学的な在り方が反映されていく。いわゆる科学の実験ということと違うんだけど、デューイは実験ということをよく言います。試行錯誤して、それで試して、その知識の確からしさをチャートしていくということです。

そういう立場からすると、全ての知識は、科学的知識も含め、日常的な知識も含めて、誤りを含むものだというよりは、誤るものであって、それを少しずつ直していくものなんだというふうに捉えるんです。

そう考えてみたときに、学校で学ぶようなことは、社会実践の中に生きるものなんだとするならば、それらはどこかで使われるものとしてある。つまり、そこでの考え方では、知識は道具なんですよね。実際の実践の中で使われる道具となるということなんです。ただ、道具といっても、実用的な意味の道具と同時に、さっきの紙コップはもちろん道具ですけど、だから、液体を入れて飲みやすくするためにあるんだけど、同時に、紙コップでこういうことをするということは、紙コップが意図されている目的のための道具ではないけれども、こういう音を出すという活動の中で生かせば、音を出すための道具になっているというふうに道具の意味を広げてありますが、そういうものとして考えていく。

そうだとすると、幼児期に学んでいることは、遊びを通して学んでいくことは、小学校のより体系的な知識の中でもう一度見直され、体系的にされながら上につながっていくけれど、その都度、実践的にということは、社会的な活動の中ではとか、体を使ってとか、物を使ってとか、そういうところで確かめられ、直されていくんだというふうに捉えています。

そのようにプラグマティズムの思想を捉えると、今、別に哲学の講義じゃないので、今のような捉え方が当たり前だと思う方と、変だと思う方の両方がいてよくて、つまり、哲学の流れの中でプラグマティズムの流れがもちろんあるから今紹介しているんですけど、もちろん反対の意見、哲学もある。哲学的にはあらゆる考えがあるから、どんな意見も、それが正解ということはないので、違う意見ももちろんあるんですけど、ともかく教育界においては、そういう思想が19世紀終わりくらいに広がり始めたときに、かなり影響していったわけです。日本の中ではおおむね大正時代ですけど、大正の始まりは1912年、本当に年号の記憶は悪いんだけど、皆さん、不安そうな顔される。多分そうだと思うんですけど、別に大正という期でなくてもいいんだけど、その時代に広がって、デューイが日本に来て長くいたのがその頃かな、もうちょっと後かな。正確には忘れましたけど(1919年だ

そうだ)、数か月はいたらしいんです。そのときに、ちなみに倉橋先生は欧米に留学していたはずで、会っていないんじゃないかなと。私もそう細かく伝記を調べたわけではないですが、どこかですれ違ったかもしれませんけど。

20世紀の初めから1930年くらいの間での哲学というと、主流はもちろんドイツのカントとか観念論哲学なわけだし、幼児教育をつくったフレーベルはその流れの中にいる人ですから、当然そういう関連で学んだはずだし、さらに20世紀に入って幾つか新しい哲学思想が出てくるわけですが、多分ある程度学んだと思いますね。

倉橋先生がどう影響されたかよく分からないのは、余り哲学者を引用していないので、あえて引用しないのか、関係ないと思ったのか、正直言ってよく分からないです。だから、倉橋先生に影響を与えたと私が言える根拠を持っていないです。そもそも私は倉橋の専門家ではないから、あらゆる倉橋の書いたものを読んでいるわけではないから、どこかに書いてあるかもしれませんよね。それは倉橋の専門家に任せます。でも、非常に大きく言えば、プラグマティズム的な考え方があるなとは思います。

小中学校でいうと、2017年の現行の学習指導要領等ですけれども、そこには別にプラグマティズムの考えだけではないですが、のような知識感というのは明らかに見られると思うんです。文科省の資料というのは文献を引用する習慣がないので分かりにくいんですけれども、2017年における中教審答申があるんですが、そこに割と詳しく論じられている危機感？というのは、そういうプラグマティズム的な捉え方と、かなり当時の教育心理学――当時というのは、そんなに変わりませんが、教育心理学の考え方が、今のような捉え方だと思われます。

どうしてそう言えるかというと、中教審答申のときの担当者というときに、もちろん事務側がいるわけですけど、そこで主に関わった人間が、私と、今、上智にいる奈須さんと、当時、東大にいた市川伸一さん。この３人が主に中教審答申の際のポジションとして緒に議論したんですけど、私と奈須さんと市川さんは、実は教育心理学です。３人とも東大出、若い頃からの知り合いという位置関係にありますけど、それはそれとして、そういう意味で教育心理学的な考え方が入っていますが、同時に思想としてはプラグマティズムが入っているということがあります。

資質・能力とか、幼児期の終わりまでに育みたい10の姿とか、保育内容とが３セットとしてつながりを持っているんですけれども、そういうものの捉え方も、プラグマティズムの考え方を持ってくると比較的見えやすくなるんじゃないかなと思います。特にプロセ

ス、資質・能力とか、そういうものは過程、プロセスなんだけれど、そういう捉え方を典型的にデューイ的といってもいいし、プラグマティズム的といってもいいです。ただ、もちろんプラグマティズムの発想だけではないんで、日本の伝統、保育実践の伝統というのは、平成元年の改訂で色濃く出ておりますので、そういうものを踏まえるということもありますし、これも別に書いてはいないんだけど、レッジョ・エミリアの影響も明らかにあって、ドキュメンテーションには書いていないんだけど、記録と評価という捉え方はレッジョの影響がある。記録と評価とか、考える、表現していくという辺りのところです。

余り時間がないんですけど、５領域の中で、思考とか考えというものが割と出たのが2017年の前、2010年くらいの改訂のときに環境領域で仕組み、仕組みを理解するみたいなことで思考というものを出したと思うんです。2017年のときには、保育内容の領域は余り手をつけていないんですけど、今度は、現在議論されているような、僕は委員ではないのでよく知りませんが、これまでの議論の範囲で言うと、多分考えを言葉で表すということが強調されるみたいなことで、そうすると保育内容、言葉とか、その辺りでもかなり強く出てくると思います。

同時に、幼稚園教育要領などの理解としては、生態学的というか、エコロジカルな発想が、組み入れたというところまではいっていないけど、入り始めているんですけれども、そこら辺をどういうふうに受け止めるかという問題は、プラグマティズムの流れとは別に研究上の重大な問題がいろいろありまして、そこも押さえておくほうがいいだろうなという気はしています。

以上です。

○司会者　　ありがとうございました。

今少し奥深い哲学というか、背景になるようなことを教えていただいたかと思っております。また、現場の先生方も、知っている人は知っている、知らない人は知らないかもしれませんが、要領や指針はある日突然改訂されて出てきましたよというものではなくて、このようないろいろな背景があった上での改訂に至っていくんだというようなことを教えていただいたかと思います。

では、ここで一旦フロアから質問をと思っております。１人か２人くらいで終わるかと思いますが、質問、いかがでしょうか。――どなたか、ございますか。もしくは、私は質問を書いたのに、ここに紹介されていないという方もいらっしゃると思いますが。

○無藤氏　　どうぞ、この本にあってもなくてもいいですよ。

○司会者　　では、お願いいたします。所属とお名前をお願いします。

○＊＊＊　大学教員の＊＊＊です。貴重なお話をありがとうございます。

ここの概要に書かれている(4)のところと、まとめてお聞きしたいんですけれども、３つの資質・能力と10の姿というところを、私は今、養成校で学生に教えているんですが、ここは議題によっていろんな言い方であったり、大切にしたいことを学生に伝えていくというところで非常に重要になってくると思っています。その辺りで、根本として３つの資質の大切にされていることとか、10の姿ができた過程で、こういうことが大事であるとか、そういうことを教えていただけたらと思います。

○無藤氏　　資質・能力とか、10の姿の大事さということ？

○＊＊＊　　そうです。いろいろ学生に伝えたいんですけれども、そこをどういうふうに言えばいいのかなというのを悩んでいるのと、あと、現場としても、資質のところをどう生かしていくといいのかなといつも思っているのでお聞きしたいです。

○無藤氏　　幼児教育、あるいは保育として大事なことは何ですかといったときに、その時期にふさわしく、子どもが周りのものに関わって、あるいは周りの人に関わって、自ら様々な発見をしていく。そこに学びが生まれて、その学びの芽生えと呼んでいますけど、いろいろな学びの芽生えが生まれていって、それが小学校や、いろんなところで、より本格的に展開される。こういう構図になっていますね。

だとすると、幼児期における学び、学びの芽生えですけど、どういうふうなことがそこで必要なのだろうかということになります。そうすると、第一に、さっきからお話ししているように、子どもが好奇心を持って関わっていく。積極的に、能動的に関わっていくその在り方、熱中していくとか、そういうことでこそ、子どもはいろんなことを学ぶんだよねということです。さらに、そこに子どもの工夫が生まれたり、いろんなことを発見する、そういうことが環境側にも用意され、同時にこちら側の姿勢というのか、としても用意されていくような、あるいは援助していくような在り方ですね。

そうすると、紙コップの例で言えば、さっきのような、子どもが待っている間、こうしていることが――よくやるじゃないですか、給食を待たせていると。余りこうやって壊してもいけないし、落ち着かなくても困るんだけど、まあ音がして面白いよね、本当はということに先生が気づけば、給食でちょっとうるさかったのはよくなかったけど、じゃ、後でちゃんとやろうか、ちゃんと遊びでねとかできるわけですよね。だから、そういうふうに子どもたちの過程とか工夫とかいうものがいろんなところに出てくるとすれば、それを

広げていくことはできるはずですね。

それが毎日いろんなところで起きていって、しかも一回で終わっちゃうと忘れるので、それが関連する次のところにどう広げていくかという流れをつくっていくことによって、子どもたちの学びというのはうまくいくだろう。

そうすると、資質・能力というのが、簡単に言えば、いろんなものを、いろんなことについて夢中になって、好きになっていく過程の中で物の特徴に気づいて、これは知識ですね。そして、自分が実現したいことに向けて工夫して、これが思考力。そういうものが入り交じっていくんだけど、そういうプロセスを活発にしよう。毎日３時間、４時間いる中で、いろんなところで活発にしていこう。その活発な在り方を遊びというんです。

もう一つは、保育内容というのは、最初のほうで世界と言いましたけど、子どもたちは、いずれ園の中から外に出ていくときに出会うであろう、この世の中の在り方で、人に出会うよね。もの、機械やら何やら、いろんなもの、生き物がいたりするよね。そういう様々な将来の出会いを豊かにしていくベースが幼児期なので、保育内容があるわけです。

その保育内容に向けて、資質・能力で規定されるような豊かな関わり方をしていくようにする。そうすると、例えば、保育内容、健康に関わって言えば、保育内容、健康というのは、一言で言うと体への関わりなんですけれども、そうだとしたら、その関わり、体への関わり方をどういうふうに豊かなものにできるんだろうか。例えば、一生懸命走るというのもある。速く走るのもあるけど、ゆっくり走るのもありかもしれない。

ゆっくり走る練習は面白いんですけどね。止まっちゃ駄目なんだけど、ゆっくり走る、こうやって。幼児でやると結構笑えるという感じなんですけど、子どもたちにやるといろんな子、けんけんで片足でやる子とか、交替でやる子とか、こういう格好でやるとか、いろいろやるじゃないですか。それは無駄な遊びに見えるんだけど、全部意味があるというのかな、体を知ることになっていて、片足立ちだって、こういうふうにしているところで、今、左足を瞬間的に浮かせるんですけど、こうするので、体のバランスの仕方も、筋肉も違うわけなんですね。

皆さん全員、私より若いから分からないかもしれないけど、私くらいになってくると、私は別にデイケアには行かないけど、そういうところでやるストレッチの中に、片足でこうするのがあるんですけど、ちょっと上げるのと、膝をこうするので難しさが全然違うんですよ。これよりいかないですけど、ここをね（実際に足を動かし机に当たり…）――いててて。今のまじで痛いんですけど（笑声）。

というのがあるんですけど、難しいんですよ。それは動かす筋肉も、関節も、足を上げているように見えて、実はこっちでバランスを取っていますから、そういう一つ一つが体に関わるんです。でも、幼児がこういう体操してもつまらないので、これを組み入れた運動遊びをどうつくっていくかというのが、今の幼児体操という分野があるんですけど、非常に大きな課題なんです。

そうすると、やたらめったら走っているというのは、運動量としてはいいと思いますけど、自分の体の動きを知るという意味では弱いんです。もっと多様な体の可能性をもっとということが、それぞれ人間関係でも、物でも、言葉でも、表現でもあるわけで、だから、さっき、これは物ではあるけど、こうやってちょっとリズムを入れた瞬間に、音遊びというか、音楽遊びに変わるわけです。そういうふうに、実は音楽というのは、与えられていい曲を聴く、経過は自由ですけど、自ら音楽はつくり出すものとか、両面があるでしょう。ということを展望するために、資質・能力と、10の姿と、保育内容というものをセットで考えようじゃないかという趣旨かな。

○司会者　　ありがとうございました。

もう一方くらいと思ったんですが、時間があと２分くらいでございまして、ここで閉じないといけないなと思っております。

第１部はここで締めくくらせて……

○無藤氏　　それで、質問の中に架け橋のことがあったので……

○司会者　　それをお願いいたします。

○無藤氏　　宣伝ね。そこに書いてありますけど、『これからの幼保小の架け橋プログラム』という本が出ました。出ましたというか、私の下に届いていて、発売は３月20日です。今、Amazonでは絶賛予約中です。前半は編者が私と古賀松香さんと、岸野さんと、吉永先生ですが、解説を書いていて、後半が実践になっていますので、架け橋の御質問をいただきましたけれども、ある程度そこに書いてあるので見てください。

○司会者　　ありがとうございました。

いろいろな自治体関係者の皆様、各園の皆さん、こちらを勉強していただいて、養成校の教員もこれを買って勉強するということで、と思っております。

では、一旦第１部をここで区切らせていただこうと思います。どうぞ拍手を。ありがとうございます。

（満場拍手）

それでは、第２部までの間、15分休憩とさせていただこうと思います。

――了――